

日本語教育の視点を活用した人材育成

—複言語・複文化コミュニティ構築を目指して—¹

松岡 洋子 (岩手大学)

足立 祐子 (新潟大学)

【キーワード】 複言語・複文化コミュニティ、人材育成、日本語教育の知見

1 社会構成員の多様化とコミュニケーション課題

1.1 社会構成員の急激な変化

政治、経済など様々な理由により人々が国を超えて流動する現代社会では、生活コミュニティの成員も多様化が進み、日常生活上のさまざまな場面で、言語・文化・習慣・背景知識の差異などが原因となるコミュニケーション上の課題が見られるようになった。日本は、他の社会と比較して単言語・高コンテクストなコミュニケーションをとる傾向が見られ、「郷に入っては郷に従え」という考え方が強い地域が少なくない。このような社会では、異文化・異言語の移住者と受け入れ側のコミュニケーション上の齟齬や誤解の責任は、移住者側にあると捉えられがちである。しかし、移住者が常に移住先の言語や文化に適応して生活しているわけではない。

1.2 コミュニケーション課題解決の方向性

コミュニティでこのようなコミュニケーション課題に対応する方向として、「単言語・同化主義的対応」、「多言語・多文化主義的対応」、「複言語・複文化主義的対応」の3つがある。「単言語・同化主義的対応」では、社会全体の効率化は図れるが、言語が通じないことに起因する受け入れ側と移住者側との対立、あるいは社会的弱者層の孤立化・周縁化の危険性が高まる。「多言語・多文化主義的対応」では、異言語間のコミュニケーションが限定的となり、それぞれが並立し、社会的統合が困難となる。それに対して、複言語・複文化的対応、すなわち、コミュニティの個々の成員が複数の言語・文化を理解し駆使することによって、異言語・異文化間の対話の実現、対立の回避の可能性が高まることで、多様性を認める社会の実現に資する。

「複言語・複文化的対応」は、これまでの日本社会におけるコミュニケーションとは大きく異なる。「察する」、「空気を読む」「常識の共有」を前提とした「語らない」コミュニケーションではなく、伝わらないことを前提とした「対話」コミュニケーションである。さらに、一言語、一手段でなく、多様な言語、多様な手段で伝えあい、相互に理解を確認しあう協働的情報伝達による対応である。このような複言語・複文化的対応は、コミュニティメンバーの多様性を認め生かす社会の構築実現の鍵となる。

2 コミュニティの社会的意義

近年、コミュニティの重要性について注目が集まっている。ここでは、地域コミュニテ

ィを形成し維持する意味、機能について、いくつかの例をあげる。まず、防災・災害時対応である。災害時の対応には地域の日ごろからのつながりと備えが重要であることは、2011年の東日本大震災でも再確認された。次に、教育・福祉である。教育、福祉の対象は地域で把握され、支援される。また、生活圏の形成・維持（たとえば、必要な自然環境や生活環境構築）にとっても地域コミュニティの存在は欠かせない。これらは、いわば社会的共通資本であり、その構築には成員間の合意形成が重要である。

3 コミュニティキーパーソンと複言語・複文化コミュニケーション能力

コミュニティのすべての人々が複言語・複文化的対応力を持ち、コミュニティの形成、維持に資する市民としての役割を果たすことが、コミュニティの理想的な姿である。しかし、急激な変化にさらされた日本の地域コミュニティでは、まずコミュニティのキーパーソンがその能力を獲得する必要がある。それは、異言語・異文化間の人々が相互に交差しコミュニティの合意形成を行うための原動力となる。ここで述べるキーパーソンとは、職務・任務としてコミュニティ維持に関わる人材が中心となる。たとえば、行政職員、保健師、教師、消防署員、警官などの職業人のほか、民生委員、児童委員、町内会長、消防団員などボランティアではあるが制度的にコミュニティに関わる人々も含まれる。

4 キーパーソンへの研修の提案

日本語教育の現場では教師が学習者とコミュニケーションをとる際に、言いかえ、繰り返し、身振り手振り、絵や図の使用、外国語による置き換えなどの多様なコミュニケーションスキルが駆使される。また、異なる言語・文化間のルールの違いへの配慮、対応なども行われる。これは、コミュニケーションの目的を意識し、つぎにその目的を達成するために誰にどうなってほしいのかを考え、そのための方法を計画し、実践するための手段である。実践がうまく進まない場合には、学習者の反応などを見極めながら別の方法を考えたり、目的そのものを再設定したりする。このような日本語教育の知見は、多様な背景の人々が混在するコミュニティのキーパーソンを対象とした複言語・複文化的対応力を高める人材トレーニングに活用できる。トレーニングのキーコンセプトは、異言語・異文化の相手とコミュニケーションをとるための多様な手段の獲得と意識の獲得である。

このトレーニングでは、コミュニティで起こるコミュニケーション課題例を提示し、その原因、背景などを考え、「言いかえ・繰り返し」、「配慮」、「複言語的対応」などの対応例を検討し、その要点を整理していく。このトレーニングによって、異言語・異文化間のコミュニケーションの配慮のポイントを理解し、スキルを獲得することを目指す。

現在、この研修用事例が蓄積され、試行が始められた。今後、受講者に対するトレーニング後の意識・行動の変化の分析によって効果の検証を行い、改善を図る。

¹ *本発表は科学研究補助金基盤研究（B）（平成 20～23 年度）課題番号：20401024、研究課題：24401125「移住者と受入れ住民のコミュニティ形成に資する複言語コミュニケーションと人材育成」（代表：松岡洋子）の成果の一部である。